

## 第2回（仮称）これからの図書館構想策定検討委員会 議事録

- 1 日時 令和2年12月11日（金）午後6時40分～午後8時00分
- 2 場所 光が丘図書館2階 視聴覚室
- 3 出席者 野口委員長、長谷川副委員長、齋藤委員、田倉委員、片岡委員、三澤委員、中川委員、湯澤委員、田村委員、八尋委員
- 4 事務局 教育振興部長、光が丘図書館長、計画調整係係長、計画調整係職員
- 5 公開の可否 公開
- 6 傍聴者数 2名
- 7 議事等
  - (1) 議事確認
  - (2) 練馬区と図書館の現状等について
  - (3) 議題
    - ・情報拠点としての図書館とは
  - (4) その他
  - (5) 次回の予定
- 8 配布資料
  - (1) 第1回（仮称）これからの図書館構想策定検討委員会 議事録
  - (2) 第1回検討委員会の視点
  - (3) 練馬区と図書館の現状等
  - (4) 練馬区立図書館の配置状況と人口分布
  - (5) 情報拠点としての図書館とは（ワークシート）

## 9 会議の概要

### (1) 議事確認

委員長より、資料1「第1回(仮称)これからの図書館構想策定検討委員会 議事録」について議事内容確認

(委員による議事承認)

### ○ 委員長

第1回検討委員会ではさまざまな意見が出されました。それらの意見は、資料2「第1回検討委員会の視点」にあるように、「情報提供のあり方」、「地域に根差した図書館」、「交流拠点」、「連携」の4つの視点に整理されました。ここから、これからの図書館には、このような視点を踏まえた取組が必要なのではないということが読み取れます。

この4つの視点の他にも、さまざまな視点を今後の意見交換の中で見つけていければと思います。

事務局より、構想の検討に至るまでの経過と、この委員会についての位置づけについて説明

(委員による質問・意見無し)

### (2) 練馬区と図書館の現状等について

事務局より、資料3「練馬区と図書館の現状について」に基づき、説明

### ○ 委員

資料3 1「練馬区と図書館の現状等」P5(4)の自動貸出機について質問です。これは現在、練馬区のどちらの図書館に設置されているのでしょうか。

### ○ 事務局

練馬区では、各館に設置されております。

### ○ 委員長

コロナの状況に関連し、セルフ除菌機を設置している図書館も多いですが、練馬区でもそういった取組はされているのでしょうか。

### ○ 事務局

全館ではありませんが、現在、練馬区では石神井、貫井、南田中、小竹、関町、大泉の6館に設置しております。

## ○ 委員長

セルフ除菌機は、コロナウィルスに対しての効果は分からなくとも、安心感が得られるというところで求められる人も多いのではと思います。

## ○ 委員

IC タグについてですが、約 10 年前に南田中図書館に導入されて以降、他館に波及していないのは何か理由があるのでしょうか。また、デジタルサイネージが設置されている 5 館はどのように選ばれたのでしょうか。

## ○ 事務局

南田中図書館は、練馬区で第 1 号の指定管理館であり、指定管理者からの提案のひとつであった IC タグシステムを導入したという経緯があります。全館設置に向け、蔵書数やそれに伴う機器の導入など、費用対効果なども含めた検証を行っておりますが、現時点で具体的な予定はたっておりません。また、デジタルサイネージにつきましても、各指定管理館の提案により設置し、効果を検証しているところでございます。

### ( 3 ) 議題

- ・ 情報拠点としての図書館とは

## ○ 委員長

資料 2 「第 1 回検討委員会の視点」の 4 つの視点のひとつに、「情報提供のあり方」があります。図書館は、地域の情報サービスを担う核でもありますので、図書館 = 情報拠点ということで、今回は皆さんと意見交換をしたいと思っております。この議題は本日だけで決定するわけではございません。配布したワークシートに沿って意見を伺い、本日だけでは出し切れないところもあるかと思っておりますので、また次回も引き続き議論できればと思っております。

ワークシートでは、( 1 ) 「情報拠点」のイメージ、( 2 ) どんな「情報」を取り扱うべきか ( 情報の種類や方法 ) ( 3 ) 今後、情報「拠点」としてどうあるべきかの 3 つの柱立ての中で皆さんと意見交換したいと思っております。

ここでいう「拠点」という言葉は、必ずしも「場」としてだけではなく、当然、「機能」という意味もありますので、少し広めにとらえて頂ければと思います。先ほど、事務局よりお話もありましたが、現在、ウィズコロナという状況があります。図書館を利用したいというニーズがある一方、非来館サービスのニーズというのにも注目されてきています。そういった機能を支える拠点という意味合いも当然出てくると考えられます。ウィズコロナだけではなく、これまで蓄積してきた取組や実績等も踏まえつつ、アフターコロナをどう考えていくのかというのにも念頭に置いて、拠点の意味合いについて意見交換できればと思います。

まず「情報拠点」のイメージについて、ご意見ある方いらっしゃいますでしょうか。

○ 委員

それは理想的なイメージということでしょうか。それとも、現状のイメージでしょうか。

○ 委員長

両方あると思います。

○ 委員

今回の検討委員会は、平成 25 年に制定された「練馬区立図書館ビジョン」を基に立ち上がったということですが、平成 25 年といえはすでに 7 年前で、このビジョンが 10 年計画だとすれば、3 年後のイメージで話せばいいのか、あるいはここから 10 年後、20 年後の話なのかでだいぶイメージが変わってきます。

○ 事務局

根幹としてのサービスということで、必ず押さえなくてはいけないところと、この 5 年、10 年後にどのような機能が必要かというところで意見をお出し頂ければと思います。

○ 委員

こんな風であればいいなと思うのは、皆さんが困ったときの情報の拠り所であればいいというのがあります。その手法はアナログであってもデジタルであっても、「こういう方にはこういう方法があります」という、どんな方法にも対応するシステム、統括的なシステムが図書館にあれば、公共サービスとしてふさわしいと思います。10 年後、20 年後というと、図書というものがマイナー化しているかもしれませんし、何が大事かということも変わっているかもしれません。常に時代の変化に対応し、そのときそのときに必要な統括的な情報とは何かを考え、日々成長していくのが、情報拠点として一番ふさわしいあり方だと考えました。

○ 委員長

先を見据えるといいですか、5 年先、10 年先というと、私たちの暮らしの有様も、今回のコロナという突然の出来事によって急激に変化してしまうということを考えると、想像しにくい側面もあります。特にデジタルな情報の話になってきますが、急激に進展していったときに、5 年後の情報をめぐる環境はどうなっているのだろうかなど、少し考えにくいところもあるかと思いますが、変わるものだという前提で出せる図書館像というものの意見を出し合うことは非常に重要だと思います。

○ 委員

アナログの図書は当然、冊数に限りがあり、そこで著作権を守っているところもあるのか

と思うのですが、もしデジタル図書をオンラインで貸すことになると、無制限での貸出しになるのでしょうか。

#### ○ 委員長

現在の公共図書館による電子書籍のサービスは、基本的には紙の図書の貸出しのモデルをそのままデジタルに援用しており、点数制限も貸出期限もあります。技術的には何冊でも貸出可能なのですが、「電子書籍貸出サービス」という言い方もあり、あくまでも冊数や期限を定めて貸すという概念の中で対応しているのが現状です。

#### ○ 委員

海外では、無制限に貸し出すのでしょうか。

#### ○ 委員長

海外でも基本的には同様に数や期限を制限しているのが一般的です。もしも1つの作品を無制限に貸出可能とするならば、著者に対しそれなりの金額を払うということになると思います。情報の拠点として、デジタルコンテンツへのアクセスということを見ると、著作権に対する問題は避けては通れない話だと思います。実際は、権利問題や制度的な枠組みの中で不可能な部分もありますが、そこはまず置いておいて、こんなサービスや取組があったらいいのではという意見を自由に出して頂ければと思います。もしかしたら、そういった問題を乗り越えるモデル提案みたいなものをしていっても良いかもしれないと思います。

#### ○ 委員

ワークシートの(1)から(3)のすべてにまたがる話になります。多くの方たちは、家でパソコンやスマートフォンを活用していろいろな情報を手に入れています。なおかつ、情報が手に入るだけでなく、例えば通信販売などは、実体化して家に届けられたりします。そういった世の中において、図書館にわざわざ来る必要性は何だろうと考えたときに、バーチャルからリアルにつながれる場所であるべきだと思います。先ほど、光が丘図書館が力を入れているという、高齢者の生活に役立つ資料を展示した「オレンジコーナー」を見せて頂きましたが、インターネットに精通していない方や、日ごろから図書館に通い慣れている方たちは、実際に「オレンジコーナー」を見て、いろいろと勉強をします。でもそこで終わるのではなく、そこから先が知りたいわけです。コーナーに配置された認知症の本を読んで終わるのではなく、その先の困ったことを解決するために必要な情報として、医療機関や福祉機関などの地域包括システムにつながっていけるような場所であると、情報拠点として非常に大きい意味があるのではないかと思います。図書館は、誰でも手に入る情報というよりは、行政の一機関として、非常に豊かな資源である行政情報が手に入る「場」であり、さまざまな場所へつながれることは大事ですし、行政同士のつながりの中で、全国の行政の情報が整理され閲覧できるなどが可能になれば良いと思いました。同時に、布の絵本等、いろんなボ

ランティア団体や組織が関わってきており、また関わりやすい場所であるということも理解しました。図書館は、地域の情報を蓄積し、集めておける場所であり、それらの情報を地域の目利きとして、地域の人々につなげていき、活動の場に導いたりできると良いのかなと思います。

練馬区は 13 館中 11 館が指定管理館ということ为先ほど伺い、少し驚きました。指定管理は「こういったことをやってください」という契約の中で運営されていると思いますので、先ほど話した行政同士のつながりなどは指定管理の範疇に含まれないと思うのです。その範囲の中で、図書館の職員の方がいろいろ創意工夫されているのであれば、いろいろなことができるでしょうし、逆に指定管理の幅を広げ、いわゆる図書館業務以外のこともこなせるような契約や、仕組みができるのかもしれないと、驚きつつもどんなことができるのだろうと考えました。

あともうひとつあるのですが、私が教えている大学の生徒たちは、レファレンスをしません。自分の頭の中でだけ考え、「分からない」、「困った」と言っています。もし可能であれば、図書館の方に出張サービスをして頂き、レファレンスの技術や大事さのようなものをもっと浸透させて頂くと良いと思いました。

## ○ 委員

大学生がレファレンスをしないという話と関連していますが、小学生がコロナ禍の中、家にいることが増えたことで、今まで以上に YouTube 情報やネット情報がどんどん入ってきていることが非常に気になります。子どもたちが、幅広い情報をバーチャルで受け取れることにより、広く興味関心を持つことができる一方、深く探求するのではなく、浅くなっているところが気になります。リアルな体験では無いので、興味関心の持ち方が広くなり、深く極められないのではと思います。これまでは、知りたいことがあるから調べに来て、読みたい本があるから探しにくるのが図書館でした。でも今は、自分から探求しなくても、勝手に情報が入ってきて、もっと知りたいという欲求が無くなるのではと思います。レファレンスして情報を探すという体験も、無いのだと思います。その子どもたちが大学生になれば、確かにレファレンスしないだろうなと感じます。でもそれを、今の子どもたちにどう伝えたらいいのかが難しいです。

最近、小学校の図書室に行ったときに、テーマごとに配架されている場所があり、そのテーマの出し方が図書の先生によって、とても深かったり、おそらく学校の先生と連携されているのか、授業に関連していたりして、そこに大人の「触って欲しい」や「感じて欲しい」、「知って欲しい」という願いや知恵のようなものが表れていました。「これお薦めですよ」とただ本を置くだけでなく、「この世界はとても奥深くて面白い」というような、その世界全体をテーマとして紹介してくれるような、そんな情報があると探求したくなる欲求が起るのかなと思いました。親も図書館がそういった場所であれば連れてこようと思うのかなと思います。ネットにはたくさんの情報があるので、何か分からないことがあれば、ネットで調べれば良いと、私も思います。でも、図書館にも誰かの専門性や想い、深い探求が

見える情報をまとめた、例えばセレクトショップのような場所があれば、図書館に行けば何か、情報と情報がつながるものがあるのではないかと、親も子どもを連れてくるのではないかと思います。図書館に行けば、自分ひとりでは伝えられないことを子どもに教えてもらえる、そんな情報拠点になると良いのではと思いました。

#### ○ 委員長

図書館とは、NDC（日本十進分類法）という世界の中で、私たちに情報の広がりや深まりを体感させてくれる場であると思います。でもそれとは別に、インターネット情報サービスの広がりもあります。先ほど皆さんからの意見にも出ましたように、インターネットを利用した広い世界は皆さんも実感しているところであると思いますが、改めて図書館のサービスを考えたときに、広がりのある情報をどう深めていくか、図書館は、情報の深まりという部分をサポートしていけるような場所であれば良いと思います。

#### ○ 委員

インターネットでは、どの情報とどの情報を選んでつなげたらいいのかというのが難しいので、図書館でナビゲートして欲しいです。

#### ○ 委員長

そういう意味では、それを担う司書の存在がすごく重要ですね。

#### ○ 委員

「オレンジコーナー」では、毎回、司書がテーマにあわせた選書をしているという話を伺いました。最初は、認知症関係の書籍を置こうと思って作ったコーナーでしたが、利用する介護施設の方などへの広がりや、紙芝居を置くようになったり、いろいろな広がりを見せられるようになったそうです。ほかにも、介護施設で行われているイベントや、地域の情報などを目で見ても知ったりすることもできるというと思います。司書の方にとっては大変な仕事だとは思いますが、図書館に行けば、情報がいろいろな形で広がり、深まっていくというか、出会わせてもらえるような場所になればいいと思います。

#### ○ 委員

司書の方が選書に頭を悩ませるという話がありましたが、毎回、図書館側から情報を与えるのではなく、市民の人からの意見も取り入れてもらえるようなことがあっても良いのではと思います。情報というと、すぐにパソコンの情報を思い浮かべるとは思いますが、パソコンを使える人とまだそこまで使えない人もいます。「どうやって使うのか」となったときに、毎回、図書館員の方ではなく、市民を巻き込んで、パソコンが得意な人に教えてもらうなどがあっても良いと思います。また、ブックポストにたまった返却本を回収し、ブックトラックに載せる作業なども、図書館員である必要はなく、もしも市民の手助けがあれば図書館員

の方も楽になるかもしれません。例えばワークショップや健康教室など、図書館以外の場所での活動も、「それはどこでやっています」と教えてもらえるなどの発信もあると良いと思います。シアトルの図書館では、求職している方が情報を求めて図書館に来ていました。「町の図書館はよろずやさん」といって、図書館に行けば自分も面白いことがあり、聞けば「ここには無いけど、あそこにはありますよ」と教えてもらえたり、もしもスペースに余裕があれば、そこで関連するワークショップを体験できたりといった、アクティブラーニングのように、与えられるだけではなく、自分も参加できるのが楽しいのかなと思います。

## ○ 委員長

区民、市民を巻き込んでということは、例えば、視覚障がい者等に対しての音訳サービス等、現在もされてますよね。そういうところをもっと拡張していくという方向性ですね。知りたい情報をすべて図書館で得られるというのは、いわば情報のワンストップサービスです。そういう拠点という考え方は、先ほど、ほかの方からも出ていた視点かなと思います。情報の広がりという部分と深まりという部分のある種交差している部分が図書館なのではないかと、今日、委員の皆さんのお話を伺っていて思いました。その両方にナビゲートできる人が図書館司書なのかなという気がしますし、拠点としての図書館という部分があるのかなと思いました。

## ○ 委員

私の図書館の情報拠点としてのイメージは、最後の砦という感じです。漠然と知りたいことがあり、何を調べたらいいかわからないときに図書館へ行くと、それが見つかる。それが先ほどの書庫の見学で説明されていた「最後の1冊は残している」ということにつながるのかなと思いました。いろんな分野において、歴史的に積み重なっているものがあるから最後の1冊は残している。インターネットでは、検索したいワードを入力すれば、たくさんの情報が出てきますが、知識が無いとそこから深めていくことが難しいです。民間は、利益追求なので、売れないものは絶版や廃盤ということがありますが、図書館はそうではなく、歴史的な積み重ねがあるので、何かあったら図書館へ、図書館にも無ければ諦めようと、そういうイメージがあります。

## ○ 委員

図書館は、情報が流れているイメージというか、入ってもきますし、発信する場所でもあるというイメージがありますが、現在は、少し発信が弱いのではと思います。光が丘図書館のオレンジコーナーですとか、大変素晴らしい取組ではありますが、あまり知られていないように思います。これは発信という部分がもしかしたら足りないのではと思いました。

## ○ 委員長

図書館としてはいろいろな発信をしているのですが、それが本当に必要な人に届い



ているのかというところも、もう少し考えなければいけないのかもしれないですね。

## ○ 委員

私の現実的な情報拠点としての図書館のイメージは、時間に余裕のある人が訪れる場所です。今はインターネットで何でもすぐに調べることができますし、その情報も多くの参考資料を基にまとめられた信頼性の高いものが多いです。図書館は、自分から知ろうとか、能動的に考えたいと思う方で、さらに時間的余裕のある方が利用しているように思います。これからの理想的な図書館のイメージとしては、皆さんがおっしゃっているように、自分が欲しい情報を広げることも深めることもでき、連鎖的に欲しい情報につながれるような場所であれば良いのではと思います。

## ○ 委員長

やはりリアルな場として、図書館の中だけでのサービスに限定してしまうと、時間的制約は拭い去れません。先ほど話が出た電子書籍のサービス、いわゆる ICT の活用をうまく利用すれば、もしかしたら時間的制約を超えたサービス提供ができる側面もあるかもしれません。そういった側面も併せて考えていくことができれば、図書館のさらなるサービス強化や、提供できるサービスの広がりができるかもしれません。そうすると現状のイメージ像とは違う図書館像にもう一步踏み出せるかもしれないですね。

## ○ 副委員長

「情報拠点」とだけ聞くと、何でも情報があるというイメージですが、そこに図書館が関わってくると、情報の専門家というか情報のコンシェルジュがいて、利用者と資料を結ぶというイメージに変わります。また、いろいろな情報をさらに深く知るということも大事ですが、図書館の利用者は目的なく来館される方も多くいらっしゃり、専門的な資料や地域の資料をどう使ったら良いのか、そこから何が得られるのかなど分からない方もたくさんいらっしゃると思います。目的が無い方がいらしても、情報を手に入れて、新しい自分の興味を広げたり、何かチャレンジにつながったりするような仕掛けをするのが、情報拠点としての図書館の役割なのかなと思いました。

## ○ 委員長

練馬区には美術館と複合した貫井図書館がありますが、美術作品も1つの情報ですよ。芸術作品も、私たちの心に訴えかける情報ですし、そういう意味では、情報の幅はものすごく幅広いと思います。今日の議題は、ここでまとめようという話ではありませんので、ワークシートにどんどん意見を記述して頂き、事務局へ戻して頂ければと思います。それを基に、引き続き次回の委員会で議論できればと思います。

( 4 ) その他

( 委員による質問・意見無し )

( 5 ) 次回の予定

閉会